

火星



平成15年11月号

四大抄

山尾玉藻

色鳥やオモニふたりに椅子ふたつ

キムチ屋のおばさんの秋団扇かな

ゑのころに市場の水の流れきし

鶏頭に水打ちである焼肉屋

草の絮とぶ鶴橋のガード下

鶴橋も女も赤し雁のころ

軍鶏伏せし籠に時雨のありにけり

それぞれに蕎麦がいちまい鴟の昼

蛇遣ふ棒が秋日に寝かせあり

棒鱈のつつかへ出たる水屋かな

火星作品 山尾玉藻選

夏 瘦せて空也の瘦せと思ひをり
う からのらに八月の海なまぐさし
白 桃の紅濃きところより剥きぬ
ア ルバムの顔へ稲妻走りけり
青 柿にこつんと触る樽神輿
盆 の僧袂まさぐりつつ来らる
か なかなの山に入りたるジヨベルカ
日 の盛りぼんぼん時計抱へ来し
星 の夜の寝かせて長き掛時計
庭 下駄の搏られてある野分かな
鉾 立の縄切れ寄せてある月夜
陶 枕やアジアの雨の大粒な
八 朔や手桶の底の大鯨
神 戸 深 澤 鱻
西 宮 米 澤 光 子
八 幡 吉 田 島 江

盆提灯の絹越しのあなたかな
余部や百の魂棚谷の中
紀の国の入口曇る葛の花
秋色の岬の一人動きをり
台風のごづぐづと来る新松子
出水川音なく流るばかりなり
炎畫の腰の浮輪の歩きをり
大き樹より足下りてくる九月かな
母馬と仔馬のあとは鰯雲
天王寺の亀を見てゐる残暑かな
泡ひとつあげて秋立つ水中花
万燈会の刻には早しスニーカー
歓声に零れさうなる百日紅
ちちろ鳴く通りがかりの青果店
ゴルフ場南瓜の蔓を伸ばしをり
風音を聴きわけてゐる羽抜鶏
悪役が本番前の水打てり

吹田 伊藤多恵子

神戸 元田千重

明石 戸栗末廣

選のあとに

山尾 玉藻

夏痩せて空也の痩せと思ひをり 吉田 島江

空也上人は若くして諸国行脚の修行に出て、乞食をしながらも施物を貧民に与えるのを常としていたそうだ。島江さんは一見空也像の痩せに親しみを覚えたのであろう。作者の行動的で凛としたところは何やら空也像を思わせる。

かなかなの山に入りたるシヨベルカー 米澤 光子

誰もがこう言う情景を目にしたことがある筈である。「入りたる」と言う表現をとっているが、既にもう据えられている「シヨベルカー」である。また「シヨベルカー」には青色や緑色のものもあるが、ここではやはり黄色味がかつたものが良い。「かなかな」だけの静けさよりも、人間との関りの中の寂しさが味わえるようだ。

陶枕やアジアの雨の大粒な 深澤 鱧

作者は昼寝でもする為に横になつていたのであろう。「陶枕」とあるから暑い日だつたに違いない。ふいに夕立が来たので

あろう、降り始めの雨粒は大きい。作者は以前テレビか何かで見た東南アジアのスクールを思い浮かべたのだろう。この句の眼目の「アジアの雨」はこの辺りと思われる。「陶枕」がそう思わせたことは言うまでもない。

泡ひとつあげて秋立つ水中花 元田 千重

微妙で繊細な句である。しかし「水中花」が「泡ひとつ」あげること、「秋立つ」を感じるのには繊細過ぎる。作者の内に今日が立秋であると言う意識があつたのであろう。〈秋たつや川瀬にまじる風のおと 飯田蛇笏〉には及ばないが、身近なものに秋を感じるのが俳人の感覚である。

悪役が本番前の水打てり 戸栗 末廣

〈夏芝居げんごな監物某出ですぐ死 小澤實〉があり、これは夏芝居そのものへの突つ込みがある。それに比べ掲句は旅役者の生活を詠んでいる。勿論「悪役」らしい衣装を身につけ、それらしい化粧をほどこして水を打っているのである。水の打ち方が普通の為、可笑しみと哀しみがここにはある。

皿に葡萄合点のいかぬ契約書 小林あつ子

この作者は平明な句を詠むことが多いが、時としてこういう情景を掬い上げてくる。「皿に葡萄」は林檎や蜜柑に比べしつ

くりと落着きがある。この落着きが「合点のいかぬ契約書」に効いているのである。「契約書」は一般生活者にとつて馴染みの薄いもの、例え間違つていなくともこう言う思いにさせられることに納得する。アイロニー的な俳諧味。

何もせぬ夫の腕の秋に入る 城 孝子

「何もせぬ」は作者からの一方的な見方であり、ご主人の方はそうは思つておられないかも知れない。ここでの「腕」は仕事や働きを意味している。定年退職して家におられるご主人を時にはうつつとおしく思われるのだろうか。この句、「秋に入る」にむしる俳諧がある。

虫籠の去年の草の音なりし 浜口 高子

去年は虫籠に蟋蟀か鈴虫を飼つていたのか、入れていた瑞々しい青草も今は枯れ切つていたのである。虫籠を動かしたのか、夏を過ぎたばかりの気候に枯草の音は今更にして淋しい。「虫籠」の視線をちよつとずらしたところに手柄がある。

深呼吸して夏蝶を大きくす 高尾 豊子

暑さの為の「深呼吸」か他の理由の「深呼吸」か定かではないが、その原因は余り関係ない。「深呼吸」をすると遠くのものがよく見えたり、近くものがはつきり見えることは感覚的に納得できる。「夏蝶」が大きく見えたのもその感覚の所

為である。背景に暑さを意識させる「夏の蝶」は動かない。

手火花を持ちたく少し後ずさり 谷口 知子

こう言う句に出会うと俳句はこの変で充分であると思う。この句の「手火花」は線香火花ではなく、立つて行う明るく発火するものである。「少し後ずさり」は、発火に対するちよとした恐怖と自分の行動範囲を広げる為である。理由を言えばこれだけのことだが、いつも無意識にする行為である。これを俳句に出来るか否かが、写生に対する課題である。

鈴虫のひげより育ちはじめけり 小林 成子

もう四年ほど前になるであろうか、前年飼つていた鈴虫が大量に孵化したことがある。髭ばかりが目立つて可愛いと言えるものではなかった。まさに「ひげより育ちはじめけり」であった。「鈴虫」の季語の本意は鳴き声にあるが、この句は生態としての本意を充分に捉えている。

(以下略)

差知子俳句鑑賞

ひとりの眸あぐれば其処にいつも枯木 差知子

〔岡本差知子句集〕より 昭和五十一年作

豊中にお住まいの頃、結い竹垣を低くめぐらせた庭に高い木があった。お独り住いも六年目、玉藻先生も嫁がれて矢張り少しお寂しい毎日を句会指導にお忙しい頃と拝察する。

日常の一瞬を描かれた。

（千枝子）

玉藻俳句鑑賞

午後よりの火仕度鵜舟仕度かな 玉藻

〔火星〕平成十四年十一月号より

鵜飼は、地位のある鵜匠によって千三百年の歴史が受け継がれ篝火の下、鵜を自在に操って鮎を捕る漁法。「幽玄の世界に誘う風物詩」と言われるその陰には昼からせつせと諸諸の用意を怠らない。中七から下五にかけて畳みこむ叙法が仕度をきびきびと見せる。

（春月）

恒星圈

田中英子

日盛りの^ゼ0並びあるベニヤ板
卓上のものしらじらと夕立来る
水口に泥鱈の太る夏の月
黍嵐ゴツホの耳のどこやらに
桃洗ふ母似で母と争ひぬ

城孝子

田中吞舟

草市をのぞいてゐたる鹿の子かな
盆の昼かまどに焰立ちぬたり
盆の家の昼の裏川鳴りにけり
種茄子の上に種茄子秋立てり
鴟の晴井戸蓋ずれてゐたりけり

溪流をさかさに羽黒とんぼかな
岩壁の山柿ねらふ鳥かな
コスモスに包まれてゐる法隆寺
とんぼうと飛んでも見たき秋の空
ふるさとの干柿妻に供へけり

杉浦典子

戸田春月

左手は字も書けぬ奴百日紅
八月一日病院のお赤飯
蟬涼しギブスの先の指動き
病室に見る新涼の甲山
盆過ぎのギブスの取れはしたものの

めがね屋の鏡楯円や地藏盆
甜瓜父をうとみし日の遠く
酔へばすぐ横になる癖カシオペア
苦瓜の太りて鬼の金棒に
苦瓜を妙める窓の雲苛つ

獅子座

山尾玉藻推薦

戸栗末廣

あちこちに潦生る百日紅
水口の水の動かぬ盆の月
夏草を千切つて塞ぐもぐら穴
梅蕊ことに火星のきらめける

垣岡暎子

いつかくるひとりのくらし百日紅
籐敷いて去年の色に身の添はず
夏の夜の母の滑りしすべり台
羅の人へ流れる視線かな

高尾豊子

祝膳のなごんで来たる早松茸かな
嫁ぐ子の二階の音や流れ星
婚の荷の何も要らぬと吾亦紅
小さき手に小さき指輪水引草

堀博子

墓守にこぼれてをりし百日紅
船団にかもめのふゆる沖膾
八月の山を連ねし灘五郷
缶蹴りの音の残りし旱雲

丸山照子

七月の花嫁神の杉仰ぐ
睡蓮の橋をわたりて嫁ぎけり
紅さして座つてゐたり生御魂
青梅雨の浮島めけり后陵

山田美恵子

備長の粉鈴虫の髭の先
炎昼の影ずんぐりと這うてをる
秋蟬の影の大きく壁にゐる
盆支度夫が覗きに來たりける

小林成子

木の股に尻つかへたる秋の蟬
両の手に荷物持ちをり昼火花
新涼の火星に向かふ家路かな
虫籠と母を残して帰りけり